
キャプテン『10』

緋村 螢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キャプテン『10』

【Nコード】

N7081A

【作者名】

緋村 螢

【あらすじ】

野球少年・・野球少女の夏菅瑞稀。でも中学校は女子校。野球部などある訳もなく、ある競技に出逢う・・・

第1話 「出逢い」

俺は夏菅 かすが 瑞稀 みずき。野球が大好きだ。でも自信がない。訳は、幼稚園のとき泣いてまで一緒にいたいと思った友達とは電話もしないし、小学校のときずっと親友と言いつてきた友達ですら会っていない。だから、一度別れが来たらもう終わりなんだと思ってた。いずれ別れが来てきつと忘れてしまう。

小学校の頃ずっとやってた野球。その頃は男子に混じって野球をしてたから問題なかった。

でも中学校は女子校だ。野球部なんてある訳がない。もう野球は出来ないんだと諦めかけてた。

部活見学が始まった。この学校は全員が部活に参加しなくては行けない。

だから、適当に体を動かせられる部活にも入ろうかな、と思った。スポーツは好きだからね、元々。

今日は火曜日、クラスメートに部活見学と一緒に行こうと誘われている。

そいつの名は萱嶋樹 かやしまいつき。クラスの皆から親しまれてる。

俺がボーっとしてるとそばに来る。でもすぐに他の奴に名前呼ばれて行っちゃうけどな。

クラスから俺は嫌われてるみたいだし。

俺が話しかけると走って逃げる奴もいるし。ぶっ倒れちゃう奴もいる。

そんな俺でも、話しかけてくれる。こいつはな。

「夏菅さん、部活見学一緒に行こう。」

敬語で話しかけられると少し気味が悪い。

「瑞稀でいいよ。そっちの方が良い。俺は樹って呼ぶからさ。」

俺にとっては呼び捨てが日常だったからな。まわり男子ばっかだったし。

「は、はい。えっと、夏菅君でも良いですか？」

また敬語。・・・君？

「え？ま、まあ良いけど。・・・敬語じゃなくてタメでいいよ。」

「うん。」

なんか、顔が赤い気が・・・。まあ気のせいかな？

「部活見学行くか、文化部？運動部？」

俺は運動部行きたいけどさ。

「運動部。」

「あ、ああ。どこから回る？」

少しびびった。こんな可愛い顔してる奴が運動部か。なら、テニス部あたりが妥当かな。

「テニス部行っても良い？」

ピンゴ。

「良いよ。じゃあグラウンドな。」

「うん！」

夏菅君な、やつぱ男扱いかあ。まあ良いけどさ。樹と話しているのは心地が良い。

何事も深く追求しない。面倒くさくない。そう思ってる間にグラウンドに到着だ。

「あれ・・・野球？」

グラウンドのすみでグローブ持ってキャッチボールしている奴ら。

「テニス部の他にソフトボールもやってるらしいよ。夏菅君！」

なんかいきなり元気になったな、こいつ。・・・ソフトボール？聞いたことはあるが全く縁のない競技だ。でも野球と同じ事をしてる。

違うのは、ボールの大きさと塁間・ピッチャーの投げ方くらいだと聞いた。

でもテニスコートでやってる。しかも1面。そんなに金がねーのか。この学校は。

「樹、テニス部見てていいよ。俺、ソフトボール部見てるからさ。」

「うん。」

俺はグラウンドの隅に移動する。さっきと同じでキャッチボールを

している。

『ナイスキャッチ』『ナイススロー』などと声が聞こえる。野球が懐かしい。

この競技は野球とさほど変わらない。この部活に入るか？などと考えていたその瞬間、声を掛けられた。

「体験する？ソフトボール。」

この部活の人らしい。

「え？あつはい。」

とにかくやってみようと思った。俺がやりたい野球とどう違うのか。かなり興味がある。

「じゃあグラウンド入っておいで。」

声は女子って雰囲気ではない。容姿もどつちかと言つとボーイッシュだ。流石野球に似たスポーツだな。

「右利き？左利き？」

「右利きです。」

「ん、グローブ。」

少し小さいグローブを渡された。体育などで使われているらしい、何故か番号が書いてある『10』。俺の出席番号だ。

「じゃあ軽くストレッチやってキャッチボールでもするか。」

「はい。」

腕、足などの筋を伸ばす。軽く走って筋トレ。いつも自分がやっているほどやらなかったが量としては充分だ。

「お前名前なんてんだ？」

「夏菅瑞稀です。」

「夏菅・・・ね。ソフト部入るの？」

「一応考えてはいます。」

人数は少ない。でも動けるのなら良い。ただ・・・野球とは違う。どうしようか？

「うちの部、毎年人数少ないからなあ。中高合わせて20人くらいしかない。」

是非入ってくれよ、夏菅。あつ、俺は三浦^{みつらいつ}律。三浦先輩でも律先輩でも呼んでくれよ。」

笑った。凄い素敵な笑顔だった。入りたい、野球とは違うけど入ってもいい気がした。

「はい、律先輩！是非、第一希望にさせていただきます！」

「おう！んじゃキャッチボールでもするか！」

「はい！」

心から喜んでしまった。

これから、この部活でどんなストーリーがあるのかは俺も知らない。
でもきつと楽しい。きつと。

第1話 「出逢い」(後書き)

ここまで読んでくださって、有難うございます。
これからも続きを書いていきたいと思ひます。
どうか、完結まで付き合ってください。
出来れば感想も！

第2話 「過去」(前書き)

野球・ソフトボールとは少し離れますが、夏菅瑞稀の過去のお話です。

第2話 「過去」

キャプテン『10』く過去く

俺は、喜んでしまった。またボールを投げられる事に。

ただ、ただ！もう、なんて表現していいか分からない。

それほど嬉しかったのだ。

1度は別れの来た野球。だけど少し違う。けどまた出逢えたことに。

それから、俺は毎日のようにソフトボール部を見に行った。

PCでソフトボールについて調べてみたり。

帰りに本屋に行き、どんな競技なのか。

野球とどこが違うのか。そんな内容の本も買った。

そう、そうしている間に本入部の紙が配られた。

親のサインが必要らしいけど、親には話していない。

ソフトボールのこと。

きつと反対される。だって、小6で野球をやめろといわれた。

だから、野球部のない・野球と縁のない女子校に入れたのだ。

でも、野球ではない。

「母さん。明日から本入部だからサインちょうだい。」

母さんは夕飯を作っていた。

「あら？何部に入るの？」

息をこくりと飲み込んだ。

「ソ、ソフトボール部。」

何か睨まれた気がした。

「どんな競技なの？」

怖い……。でも、やっぱりあの快感からは離れられない。

ボールを投げる。アウトにする。協力して試合に勝つこと、その快感だけは！

「ボールを投げて、ボールを取る競技。」

母さんがまた睨み、何かを取り出す。

「この本・・・ね。ソフトボールって。野球と変わらないじゃない。許す訳ないでしょう！」

逃げ出したかった。この場から。

好きなものを好きと言いたい。

他の人にもわかってもらいたいのに・・・。

何でダメなんだよ。

勇気を振り絞った。

「サイン。ちょうだいよ。まだ続けていたい。野球じゃないけど。大好きだから。野球が。ソフトボール。やってみたいんだ。」

手が飛んでくる。

パシン

空間に音が伝わる。

母さんが口を開いた。

「野球やるんなら、出て行きなさい。」

痛かった。頬が熱い。

「早く出て行きなさい！」

俺は、学校に必要なもの・着替え・グローブ・金を持って家を飛び出す。

不思議と涙も出ない。

しかも、俺の本当の親ではないんだ。

俺の本当の親はもう死んじゃった。

俺が2歳のときに戦争で攻められてね。

その時俺はアメリカのフレイム城にいたんだ。

女のくせに王子様なんだって。一応。

そんで、皆が寝てるときに進入してきた奴らに殺されてった。

俺が薄っすら目を明けると、少し光った。

それで見えたのは赤。真っ赤な血の海。

その後少し離れたところにあつた軍の基地が爆発したよ。

光ったのは閃光だったんだ。

涙もでなかった。うん、怖すぎたんだ。

2歳だもんな。目の前が血で埋め尽くされてたからね。

怖かった。今でも夜は怖い。眠れない。

あれから熟睡した事なんて無いんじゃないかな？

うたた寝なら友達が手を握ってくれたから出来たけど。

今は無理さ。

寝るとまた誰かが殺されるんじゃないか。

また、俺一人になってしまうのではないかってね。

さて、これからどうしよう。

第2話 「過去」(後書き)

懲りずにまた読んで下さいね。
コメントを！！！！

第3話 「助け」

く助けく

けっこう歩いた気がする。

此処は何処だろう。・・・多摩川？

俺、何km歩いてるんだ。もう県境だ。

嗚呼、先生に訳を話してみようかな？

いやいや、先生に迷惑だ。

誰かの迷惑になってしまつては駄目だ。

どうしよう。

金は有る。まずは、仕事を探すか？

いや、家が先だ。何処か泊まれる場所はないだろうか？

でも怖い。寝る必要は無いからこの辺にいるのも良いのかも。

そんなことを考えているときだった。

ふと思い出した。

俺が2歳の頃、1人になって、お世話になっていた。

いや、同い年にお世話も何も無いか。

螢。苗字は知らないけど。

螢。あいつなら。

何処だったけ？あの時はアメリカで。

4歳のとき2人で日本に来て。

あいつは…この川の…

・・・何処だ？

あれ？この前、あいつに似た奴にあった気がする。

・・・誰だ？

「おい？夏菅？」

「おわっ！！」

・・・律先輩？

あれ？螢似にてる奴って。

律先輩だ。

「夏菅？・・・だよな。何やってんの？こんなところで意識はしてなかったけど、涙が頬を伝う。」

「なっ！！何ないてんだよ！！家出でもしたのか？」

俺はコクンと頷いた。

「・・・たく。両親は？心配してないのかよ。」

「大丈夫・・・です。」

そもそも向こうが出て行けって言ったんだ。

「一旦、うちに来い。」

涙を拭き、顔を上げた。

「良いんですか？・・・でも悪いですよ。急に押しかけちゃ。」

先輩はニツと笑って、

「大丈夫。俺、両親いないから。弟なら1人いるけど。丁度お前と
同年の。」

俺はそうなんですか、と笑って先輩についていった。

悪いとは思ってたけど、少し気になった。螢に似ている律先輩。
同年の弟。それは・・・？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7081a/>

キャプテン『10』

2010年11月19日16時27分発行